

実践報告(Report)

名古屋市立白鳥小学校における地域素材の教材化

——生活科と社会科に焦点を当てて——

Local resources as teaching materials in the Shiratori Elementary School, Nagoya, Japan: Focusing on SEIKATSUKA (Living Environment Studies) and SHAKAIKA (Social Studies)

相川 保敏*・内藤 智裕*・森 和久**

AIKAWA, Yasutosi*

NAITOU, Tomohiro*

MORI, Kazuhisa**

キーワード：地域素材，生活科，社会科，社会に開かれた教育課程

Key words：local resources, SEIKATSUKA (Living Environment Studies), SHAKAIKA (Social Studies), curriculums open to local society

1. 実践の背景と目的

2017年3月に公示された新学習指導要領の前文には、「一人一人の児童が豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるようにする」ことが求められている。そして、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現が重要であると示されている。これらの実現に向け、教育現場では学校全体で教育活動の改善を進めていく「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められている。加えて、前文には「各学校がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積」を生かしながら、児童・生徒や地域の現状や課題を捉え家庭や地域社会と協力して教育活動のさらなる充実を図ることも重要であると示されている。今回の改訂で、改めて地域社会との連携・協働を更に推進していくことが強調されたと言える。

松田(2017)は、「社会に開かれた教育課程」が歴史的にどう変遷してきたかを見る中で、今日提起されている「社会に開かれた教育課程」とは「主に地域連携」を示しており、「学校と地域社会との関わりが地域社会の活性化に繋がっている」ことを示唆している。地域社会の物的・人的資源である地域素材を教材として活用していくことは、児童の学習に資するという観点のみならず、地域の活性化にもつながる可能性を持っているという点で重要であると考え。例えば、林(2014)は、豊田市立西広瀬小学校(児童数49名)において、学校に隣接した休耕田と里山をビオトープと見なし、「総合的な学習の時間」の実践を行った。その際には、次の3点、①ビオトープを学校施設ではなく地域の自然環境の一部として位置付ける、②自然科学に囚われず歴史学、民俗学といった社会科学を学びに組み入れ文理融合を考慮する、③ビ

* 名古屋市立白鳥小学校 ** 椋山女学園大学教育学部

本論文は、椋山女学園大学教育学部紀要の投稿・執筆規程2により査読を受けた(2019年1月18日受付; 2019年1月31日受理)。

オトープの運用に地域の力を導入する、を重視しており、特に③では、地域社会の知恵と人的支援を後ろ盾に、児童と地域社会の協同作業を確立し、過疎化の進行により活気を失いつつあった地域の活性化を実現している。

松岡（2007）は、「社会科教育研究」第1号（1953年）から第99号（2006年）に掲載された記事を通覧し、地域との連携を扱った内容を次の4点、A. 地域教育計画および地域調査のあり方に関する研究、B. 地域社会の変容と地域学習の改善に関する研究、C. 生涯学習社会における社会科教育の役割に関する研究、D. 市民性教育としての社会参加学習に関する研究、に区分し集計を行った。その結果、1990年代後半から、Dの研究が出現し、これは、「市民参加型社会における市民の社会参加活動と学校教育における社会参加学習との協働という視点から地域との連携が構想され、地域のもつ意味が捉え直されてきているのである」と考察されている。このように、学校教育と地域連携は、理論（政策）に留まらず、実質的にも、より深まりつつある教育課題といえる。

本稿では、名古屋市立白鳥小学校における、これまで地域素材や地域人材を活用した実践をとりまとめ、今後の学びの深化のための方策を議論する。特に、地域素材との関連が深い生活科と社会科の実践を取り上げた。

2. 平成30年度（2018年度）の地域素材の活用

白鳥小学校は、名古屋市熱田区に位置し、児童数339人（2017年度）の中規模校である。表1に、平成30年度に地域素材を活用した授業の一覧を示す。活用状況を教科別に見てみると、「総合的な学習の時間」、「生活科」、「社会科」において実践がなされている。それぞれの学年を担当した教員が児童や地域の実態・実情に合わせて、前年度まで行われてきた地域素材を踏襲するだけでなく、部分的な修正、新たな教材化に取り組んでいる。白鳥小学校は、熱田神宮に隣接することもあり、熱田神宮とかわる事物・事象、歴史遺産などが地域教材として活用されている。加えて、学区内にある公共施設、商店などが地域教材として活用され、商店主や寺の住職、戦争体験者を始めとする地域の方々が支援して下さっている。

例えば、2年生の生活科「わたしの町はっけん」は、昨年度までの学習活動を踏襲した実践である。学区内にある様々な店を見学・インタビューする活動を通して「地域で働く人々と関わる中で、自分たちの町のよさに気づき、愛着をもつとともに、自分自身の在り方に夢や希望をもち、地域の一員として、地域と関わりながら、安全で適切な行動をすることができる子ども」の育成をねらっている。

3年生の社会科「のこしたいもの、伝えたいもの」の「あつた宮宿会」は地域の団体を教材とし、本年度新たに取り組まれた実践である。これまでは「熱田まつり」の際に行われる地域素材「献灯まきわら」、「子ども獅子」を教材として、これらの存続を願い活動を続ける地域の人たちを取り上げてきた。今年度は、熱田を盛り上げ、熱

表1. 白鳥小学校における平成30年度(2018年度)の地域素材の活用

学年	教科	単元名	地域素材	活用の具体	時期	他学年の学習とのつながり	他教科とのつながり
1	生活	あきとふれあおう	大瀬子公園 神宮東公園	公園遊び 公園遊び	10月 10月	総合(3年・4年)	
2	生活	わたしの町はっけん	大矢蒲鉾商店 菊田雅楽器 青雲寺 ローザンヌ 松川屋	見学・インタビュー 見学・インタビュー 見学・インタビュー 見学・インタビュー 見学・インタビュー	6月・10月 6月・10月 6月・10月 6月・10月 10月	総合(3年・4年) 総合(3年)	
3	社会	店で働く人	名鉄パレマルシェ	見学・インタビュー	9月		
	総合	発見!白鳥の町	熱田神宮 熱田祭り 尾張新次郎太鼓保存会 まきわら(外山さん) 奉納相撲	見学 題材 実演・インタビュー 講話 見学	1学期		国語「見学したことをしらせよう」(12時)
	総合	発見!昔のくらし	戦争体験談(村瀬利さん他3名) 地域歴史紙芝居(大矢さん、旭堂さん)	講話 講話	10月	社会(6年)	国語「いろいろな手紙を書こう」(6時)
	社会	のこしたいもの、つたえたいもの	あつた宮宿会(大矢さん 花井さん) 朔日市 秋葉山門通寺 亀屋芳広	紙芝居 題材・講話 見学 見学 見学・インタビュー	1月 11月	社会(6年)	国語「まちの行事について調べよう」(9時)
4	総合	金メダルのひみつをさぐろう	熱田区役所 カーマホームセンター熱田店	家電回収BOXの見学 家電回収BOXの見学	7月 7月		国語「見学したことを報告しよう」(11時)
	社会	事件・事故からくらしを守る	熱田警察署 熱田消防署 交通安全パトロール	資料提示 資料提示 資料提示	9月 9月 9月		
5	総合	知ろう!白鳥小	熱田神宮 裁断橋 誓願寺(頼朝生誕地) 七里の渡し 断夫山古墳 白鳥古墳	追究テーマ 追究テーマ 追究テーマ 追究テーマ 追究テーマ 追究テーマ	6月 6月 6月 6月 6月 6月	社会(6年) 社会(6年) 社会(6年) 社会(6年)	国語「わがまちベスト3を決めよう」(7時)
6	社会	縄文のむらから古墳のくにへ 武士の世の中へ 3人の武将と天下統一 長く続いた戦争と人々のくらし 新しい日本、平和な日本へ	白鳥古墳 断夫山古墳 誓願寺(頼朝生誕地) 信長塀(熱田神宮) 家康幽居地 熱田空襲 聖火ランナー	提示資料 提示資料 提示資料 提示資料 提示資料 提示資料	4月 6月 7月 11月 12月		国語「興味のある人物をしょうかいしよう」(10時)
	総合	発見!白鳥の歴史	上記の素材 七里の渡し 秋葉山門通寺	追究テーマ 追究テーマ 追究テーマ	後期		
特支	生・総	お買い物しよう まち探検 公園遊び お話を聞こう	小出酒店 七里の渡し 大瀬子公園 神宮東公園 熱田図書館	探検 探検 探検 探検 読み聞かせ	4月・3月		

田を外に発信することを目指し、様々な取り組みをしている団体である「あつた宮宿会」を取り上げている。「あつた宮宿会」の活動を調べ、活動に参加していくことが地域社会の一員としての自覚を目指す上で有効であるとの判断からである。

他の自治体を参照したところ、春日市教育委員会（2017）は、「地域連携カリキュラム」を「(1)地域人材を活かす教育課程、(2)地域を教材化した教育課程、(3)地域に貢献・還元する教育課程、(4)地域の人との共学を取り入れた教育課程」という4つの観点に整理している。そして、「年間実施計画を作成し、教育課程を計画的継続的に実施」することの重要性を強調している。表1の年間計画は、まさにこれら4観点に合致するものであり、各学年の教科の学習内容に応じて、学校周辺の地域の特色を生かし、様々な地域素材が活用されていることが分かる。

3. 長期に渡って活用される地域素材

地域素材には、長期にわたり活用され続けているものと、単発的な活用が終わっているものが見られる。そこで、長きにわたって活用されている素材には、どのような特性が備わっているのかを検討した。その材料として、平成2年（1990年）と平成28年（2016年）に、白鳥小学校で開催された全国社会科研究協議会名古屋大会の発表資料を用いた。社会科の全国大会であり、地域素材を教材化した実践が数多く行われている。この2つの大会の間には四半世紀の隔たりがあり、どちらの大会でも活用された地域素材は、長きにわたり生き残り、子どもの学びに活用された素材と言える。

2つの大会で発表された単元名、取り扱われた教材は、表2に示した（下段ゴシック体は主な教材）。なお、公開授業日は前者が10月26日、後者は10月21日となっており、ほぼ同時期である。

表2. 全国社会科研究協議会名古屋大会（白鳥小会場）における平成2年と平成28年の発表で用いられた地域素材の比較

学年	平成2年度社会科研究協議会	平成28年度社会科研究協議会
1	じんぐうひがしこうえんへいこう 神宮東公園	すぎだな わたしたちのこうえん 大瀬子公園 神宮東公園
2	地下鉄にのろう 地下鉄名城線神宮西駅	わくわくたんけんたい 秋の町ではっけん 保育園 図書館 パン屋 きしめん店
3	わたしたちのくらしと商店 商店街 デパート スーパー	のこしたいもの 伝えたいもの 熱田まつり 献灯まきわら 子ども獅子
4	津金文左衛門と熱田前新田 津金文左衛門	きょう土を開く 津金文左衛門 奥田助七郎 前田一三
5	わたしたちの生活と伝統的な工業 有松絞り	自然災害を防ぐ 名古屋駅 中部国際空港
6	自由民権運動と国会の開設 内藤魯一	新しい日本 平和な日本へ 東京オリンピック

平成2年と平成28年で共通している地域教材は、生活科1年の「神宮東公園」と社会科4年の「津金文左衛門」であり、長きにわたって活用された素材である。この2つの地域素材が、授業実践者によって、どのような意図で教材化されていったのかを発表会当日の研究協議のやり取りや指導案などを活用し明らかにする。教材化に際しては学習指導要領の影響が大きいので、合わせて検討を行った。

3.1. 「神宮東公園」の教材としての力

平成元年の学習指導要領で「生活科」が新たな教科として誕生し、今回で3度目の改訂となる。改訂を経る中で、地域素材「神宮東公園」はどのように扱われ、教材化されていったのであろうか。

(1) 平成2年の実践

当時の生活科は新たな教科として登場したばかりで、各学校ではどのように授業を進めていったらいいのか、まさに試行錯誤しながら実践を行っていた時期である。名古屋市社会科教育研究会（1991）第28回全国小学校社会科研究協議会名古屋大会報告書大会の記録によると、生活科を意識し趣旨を取り入れた社会科として1年の単元「じんぐうひがしこうえんへいこう」の授業公開を平野、加藤、石黒、福王寺教諭が行っている。

この実践は、当時の学習指導要領生活科第1学年の内容「(3)近所の公園などの公共施設はみんなのものであることが分かり、それを大切に利用することができるようにするとともに、身近な自然を観察し季節の変化に気付き、それに合わせて生活することができるようにする。」に対応した実践である。

公開授業後の授業研究会で、当時の授業者は地域素材の活用についての質問に次のように答えている。

地域教材の開発については、学習対象として、学区内にある神宮東公園を取り上げた。この公園には遊具や施設が整っているので、幼児から老人まで多くの人々がこの公園を利用している。そのため児童を公園の遊具や施設などの利用の仕方では自分のことだけでなく、大勢の人のことを考えて利用するようになった。

地域素材が教材となり得るための条件を、①学区内にあること②遊具や施設が整っていること③多くの人々が利用していること、としている。また、指導助言の中で、

本大会の研究は「人と人」「人としくみ」「人と自然」の3点で進められてきたが、「神宮東公園へ行こう」の授業では、自分と友達や他の利用者、自分が遊具や施設を使うときの約束、自分が公園で遊ぶ中で花や木に関心を持つという点で、うまく三つの観点が展開されてきた。

と講評されている。「公園で遊ぶ中で木や花に関心を持つ」という点から、④身近な自然があること、が教材化のもう1つの条件と考えられる。この当時、神宮東公園に

求められた教材としての必要な条件は、①学区内にあること（距離）②遊具や施設が整っていること（遊び）③多くの人々が利用していること（他者とのかかわり）④身近な自然があること（自然とのかかわり）、という4つであった。学習指導要領の内容(3)に記されたものが満たされているかどうか、条件とも言える。

なお、その後の平成10年の学習指導要領の改訂で、生活科の内容が2学年で各6項目（合計12項目）であったものが8項目の内容に再構成された。「近所の公園などの公共施設」、「乗り物や駅などの公共物」（第2学年(2)）という表現から、「公共物や公共施設」に変更されている。

(2) 平成28年の実践

生活科1年の単元「すぎだなわたしたちのこうえん～みんなであそぶとたのしいよ～」で「神宮東公園」「大瀬子公園」を教材化し、柘植、木村教諭が授業公開を行った。この授業は、平成20年改訂の学習指導要領生活科の内容「(4)公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用しようとする。」「(5)身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに関心し、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにする。」「(6)身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気づき、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。」に対応した実践である。この単元のねらいは「地域の公園の自然や施設と繰り返し関わり、遊びを工夫したり、伝え合ったりする活動を通して、地域の公園に親しみや愛着をもつ子ども」の育成である。

地域素材の教材化に関して、名古屋市社会科教育研究会（2016）第54回全国小学校社会科研究協議会名古屋大会研究紀要の中で授業者は「教材化の工夫」の中で、次のように述べている。

二つの公園は、ある程度の広さがあるため、安全にみんなで遊ぶことができる。また、様々な植物の葉や実を集めたり、草の上で遊んだりするなど、自然遊びを楽しむことができる。そうした自然を使って繰り返し関わり、工夫することで、遊びに広がりや深まりが出せると考える。これらの公園で友達と遊び、遊びの達人を目指して工夫して遊ぶことを通して、公園の良さに気付かせ、公園に愛着をもち、大切にしていこうとすることができると考える。また、学級ごとに二つの公園のうち、一方を「わたしたちの公園」として、それぞれの公園の遊びを学級ごとに追求し、最後に互いの公園を紹介し合う。このことで、相手の公園のよさに気付いたり、「その他の公園はどうか」と学区全体に関心を広げたりしていくことができると考える。

このことから、神宮東公園に求められた教材としての条件⑤ある程度の広さがあること⑥安全に遊べること⑦自然遊びを楽しめること⑧遊びを工夫できること、となっている。なお、「公園の良さに気付かせ、公園に愛着をもち、大切にしていこうとするこ

とができる」というような言葉や学級単位でそれぞれの公園を調べ、それを伝え合う活動を組み入れるなど、学習指導要領の(4)～(6)を意識して、学習活動を工夫して取り組んだことがうかがえる。

(3) 実践の比較

表3に2大会の結果の比較を示した。授業実践を行った授業者の声や考えから、学習活動の工夫では対応できない「神宮東公園」が公園として備



図1. 神宮東公園で遊ぶ児童

えていなければならない条件が変化してきたことが分かる。全く同じ地域素材が時代を経て、新たな条件を求められたと言える。

表3. 教材に適する公園の条件の比較

	平成2年の実践から	平成28年の実践から
条件	①学区内にあること	
	②遊具や施設が整っていること	⑤ある程度の広さがあること ⑥安全に遊べること ⑧遊びが工夫できること
	③多くの人々が利用していること	
	④身近な自然があること	⑦自然遊びができること ⑧遊びが工夫できること

授業者は、学習指導要領の内容に照らし合わせ、児童が自由に楽しく遊びを工夫できる環境を地域の公園に求めるようになった。そして、「神宮東公園」にはこうした条件が内在していたため、素材として生き残っていったのである。澤田ら(1996)は、「生活科の視点から見た屋外生活空間の利用状況」について、徳島県内267校を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、生活科担当者が重視したのは、「安全性が高い」、「昆虫など生き物が生息している」、「植物や生き物に触れられる」、「植物の種類や数が豊富」、「身近である」であった。これらは、表3の内容との重なりが多い。

なお、名古屋市社会科教育研究会(1991)の第28回全国小学校社会科研究協議会名古屋大会報告書によると平成2年に同様に研究発表会の会場校であった名古屋市東区の東桜小学校でも地域の公園を教材とし、「ひさやおどおりこうえんであそぼう」という单元名で授業公開をしている。公開授業後の授業研究会で、当時の授業者は地域素材をどう生かしたかという質問に次のように答えている。

久屋大通公園は、近所の公園であると同時に、名古屋市の中心部にある大規模な公園である。そのため、利用者が非常に多く、施設や自然も豊富である。そこで、このような公園で遊ばせることは、自分たち以外にも利用する人がいることに気付かせたり、公園のよりよい利用の仕方を考えさせたりする上で適した教材である。

しかし、東桜小学校では、現在、「久屋大通公園」をこの単元で活用していない。久屋大通公園は市内の中心部にあり、テレビ塔やオアシス21などがあり、イベント会場として利用されることが多い。自然も残っているが、人々が昼夜を問わずに利用するため、安心して遊ばせる環境でなくなってきたためだと言う。

現在、久屋大通公園の再開発計画が進められているが、名古屋市が開催する「久屋大通再生有識者懇談会構成員」の提言（平成29年2月）の中で、「公園の緑は、長年の歳月により過度に密生し、うっそうとした緑量となっている。そのため、遮蔽感、閉鎖的で暗い、ヒューマン感に乏しい、親しみやすさや温かみがない、親和性がなく、沿道から心理的に遠いなどの印象を与えてしまっている。」と指摘されている。



図2. 現在の久屋大通公園

つまり、前述の条件「⑥安全に遊べること」が満たされなかったため、「久屋大通公園」は生き残れなかった。大坂谷（2000）は、「小学校生活科教育からみた望ましい公園像」として、「様々な人々が利用する公園、自然豊かな公園、様々な人々や自然と触れ合える公園」という条件を挙げている。そして、「『生活科教育の場として有効な公園』＝『今後の望ましい公園』という図式が、ほぼ成り立つ」と述べている。子どもが安心して学ぶことができる公園は、当然地域の様々な人が利用しやすく親しみやすい公園であるわけであるから、久屋大通公園の今後の再開発に期待したい。

次に示すのは、新学習指導要領生活科の第1・2学年の内容(4)～(6)であるが、下線部が、今回の改訂での変更点である。

〔身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容〕

(4) 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。

(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気付くとともに、それらを取り入れ、自分の生活を楽しもうとする。

(6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

今回の改訂では、自然との関わり、遊びの創造など、自然の中で児童の発想が実現できるような環境がさらに求められている。柴田（2015）、柴田（2016）は、植田南小学校に勤務していた1995年、1996年に生活科の授業で、学校に隣接する公園にお

いて児童の協同作業による自然遊園地づくり、そして天白川での水生生物の採集活動を実践し、児童の自然への興味関心を高めることに一定成功しており、今から20年前に今回の改訂に合致した取り組みを行っている。他にも中野（2013）は、名古屋市立猪子石小学校に勤務していた際に、第6学年理科の授業において、地域の成り立ちの理解を深めるために、平和公園で地層の巡検実践を行い、児童が自発的に学ぶ機会としている。これらの実践を土台に、名古屋市では「神宮東公園」の様な自然豊かな公園が、今後も地域素材として活用され続けると考えられる。

3.2. 「津金文左衛門」の教材としての力

「地域の発展につくした先人」から学ぶ学習は、いわゆる「開発单元」と言われている。泊（2008）によると、「対象が国内の他の地域や現在の開発に広がったことが一時あったが、内容削除の対象にならず60年間ほとんど変わることなく学習内容として取り上げられてきた」单元である。その「地域の発展につくした先人」の学習の教材として、白鳥小学校では、「津金文左衛門」が取り上げられている。

「津金文左衛門」は江戸時代の尾張藩士で、熱田奉行、船奉行として活躍し、寛政12年（1800年）から熱田前新田の干拓事業を指揮し翌年完成させた人物であり、地域に関わる偉人である。「開発单元」の変遷を研究した森本（1991）によると、津金文左衛門は、1971年名古屋市教育課程社会科第4学年で、平田靱負、都築弥厚らとともに扱うこととされており、以前から全市的に扱われていた教材である。

(1) 平成2年の実践

社会科4年生での单元「津金文左衛門と熱田前新田」は、平成元年学習指導要領社会科の第4学年内容「(4)地域の文化や開発などに尽くした先人の具体的な事例を調べて、先人の働きや苦心を当時の人々の生活の様子や考え方、技術や道具などの面から理解できるようにするとともに、現在にあっても地域の人々の生活の向上と安定のためにいろいろな努力がなされていることに気付くようにする。」に対応した実践である。公開授業後の授業研究会で、当時の授業者である稲垣、伊藤、嶋村、平林教諭は、地域教材についての質問に次のように答えている。

津金文左衛門が干拓工事を進めた熱田前新田は、面積347haの土地である。この熱田前新田を取り上げたことは、児童に、広大であり、しかも海の中に土地がつくられたということに対して驚きや疑問を持たせる上で有効であった。

干拓後の入植者の苦労や工夫を捉えさせることができる教材であるので、それを基に、地域の発展にはいろいろな人の働きがあったことに目を向けさせることができた。

地域素材を教材化するに当たって、①開発に驚きや疑問を持たせるもの、②苦労や工夫を捉えさせることができること、を条件としている。

(2) 平成28年の実践

平成28年度にも、社会科4年で津金文左衛門を扱い、大橋、塚本教諭が実践を行っ

た。単元「きょう土を開く～名古屋南部の開発を支えた人々～」で「津金文左衛門」「奥田助七郎」「前田一三」を教材化し、授業公開した。「奥田助七郎」は明治期の土木技師で、名古屋港開港に尽力した人物である。「前田一三」は戦後の名古屋港を復興させ、工業化と安全な港づくりに尽力した人物である。

この実践は、平成20年改訂の学習指導要領社会科の内容「(5)地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。ア(略) イ(略) ウ地域の発展に尽くした先人の具体的事例」に対応したものである。この先人の働きに関する部分は、平成10年学習指導要領から変更がない。平成元年学習指導要領と比べると「地域の開発に尽くした先人」から「地域の発展に尽くした先人」、「当時の人々の生活の様子や考え方」から「人々の生活の変化や人々の願い」というように、発展・変化を学べる教材であることが求められている。この単元のねらいは「名古屋南部の開発に尽くした先人の働きや苦心について理解し、先人の働きが名古屋の人々の生活の向上に果たした役割を考え、地域の発展に関心を持ち続ける子ども」の育成である。具体的には、江戸時代の「宮の渡しー熱田湊」から現在の名古屋港へと発展させた三人の先人の働きや苦勞、現在も名古屋港管理組合が中心となって開発が継続されていることを学習していく流れである。

(3) 実践の比較

「津金文左衛門」は歴史上の人物であり、平成2年の実践では、彼が生きた時代の工夫や努力をとらえる点に重点が置かれ、児童が生きている時代と彼が生きた時代が線で結ばれる学習であった。泊(2008)によれば、「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」の内容が「定着性が低い」とし、その理由として、「学習後時間が経過している。人物が扱われていなかった。学習する時間が少なかった。資料館や現地で具体的に調査したりお話を聞いたりする学習をしていなかったなど」を挙げている。そして、「日常生活で用水や新田などを目にしたとき4年生の学習がよみがえるような指導が行われることを願っている」と述べている。「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」が、児童の現在と関わっているという実感が持てなければ、児童にとっては、一回性の知識として、「定着性」が低いものになってしまうのであろう。

28年の実践では、児童と津金の間に、奥田と前田という新たな経過点が加わり、地域の発展や変化が捉えやすいように工夫された。「津金文左衛門」は他の地域素材と結びついていくことで、教材として生き続けたと言える。

今回の学習指導要領の改訂により、3年・4年とまとめられていたものが学年ごとに分けられ、先人の働きは第4学年の内容(4)で次のように示されている。

(4) 県内の伝統や文化、先人の働きについて、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア)略

(イ)地域の発展に尽くした先人は、様々な苦心や努力により当時の生活の向上に貢献したことを理解すること。

(ウ)見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア)略

(イ)当時の世の中の課題や人々の願いなどに着目して、地域の発展に尽くした先人の具体的事例を捉え、先人の働きを考え、表現すること。

小学校学習指導要領解説社会科編の中で、「先人の働きに関する内容については、アの(イ)及び(ウ)とイ(イ)を関連づけて指導する。」と記されている。また、内容の取り扱いにおいても、「開発、教育、医療、文化、産業などの地域の発展に尽くした先人の中から選択して取り上げること。」と記されていることから、「津金文左衛門」は今後も地域の開発に尽力した人物として活用され続けていくと考える。

4. まとめ

本校では、先に地域素材の教材化とその活用についてはそれぞれの学年に委ねていると述べた。しかし、地域素材の持つ力を分析していくと、「内在しているものを見出す」、「他の地域素材と関連づける」ことで、これまで切り替えられていた地域素材が教材として生き残ったり、さらなる魅力ある教材に発展していくことも考えられる。そこで、これまで分析してきた「神宮東公園」を「津金文左衛門」のように他の地域素材と結びつけていく試案を考えたい。



図3. 名古屋台地

本校は、名古屋城を北端として象の鼻のように伸びる熱田台地の南端「熱田神宮」の西隣、熱田台地の端に位置している。古墳も見られ、古くから人々が生活していた。近世以降、学区の南側、台地の南端にある「七里の渡し」の船着き場周辺は人や物が行き交う交通の要所として発展し、江戸末期に発行された『尾張名所図会』には荷を積んだ船や漁をする船が浮かび、陸上には御殿や旅籠、店が並んでいる様子が描かれている。また、学区の西を流れる堀川には江戸期から貯木場が広がり、木曾檜を始め全国の木材の集散地として発展し、学区の東を流れる新堀川（「精進川」改修に伴い明治44年に名称変更）沿いには木材市場や車両工場なども設けられていた。

「神宮東公園」は1985年（昭和60年）に開園した公園で、新堀川沿いにあった日本

車輛製造や東洋プライウッドの工所用跡地に作られた都市公園である。平成2年の社会科研究協議会の際に発行した写真資料集「目で見える白鳥」の解説文の中で、車両工場に関する記述が残っているので紹介したい。

1896年（明治29）、三本松町と隣の横田町に車両をつくる工場ができた。初めは木材で車両をつくっていたが、だんだん鉄鋼が使われるようになった。戦争中は横田町の工場が兵器工場となり、やがて閉じられた。今では新しい工場も建ち、自動車や工業機械の部品などいろいろな金属部品がつくられている。日本車輛の本社工場は他の地域に移転したが、関連工場が三本松町・花表町にある。写真の工場では、電車のドアや車両連結部の部品をつくっている。



図4. 関連工場の様子

また、学校創立百周年を記念し昭和48年に発行された副読本「わが郷土白鳥」の中には、次のような記述がある。

【木工業】神宮には昔から宮大工と呼ばれた人がいて、本殿や拝殿などを専門に造っていました。30年ほど前まではたくさんいましたが、今では数人に減ってしまいました。しかし、木材を使って、荷造り箱、魚を入れる箱、家具、ベニヤ板、車、舟などをつくるのが盛んになってきました。昔、木曾の山林は名古屋の殿様のものであったので、堀川につくられた木場（白鳥貯木場）では、木曾のよい木材が、安く、たくさん売り出されました。そこで、製材や木工の人たちが集まってきて、木場の近くで仕事をするようになり、木工業が盛んになってきたのです。7-80年前から、堀川や新堀川沿いに、製材工場、木工場、造船所ができ、車両工場では、木で電車や汽車の車体をつくるようになりました。

車両工場から、時間を遡っていくと、木製、木工業、新堀川、堀川、貯木場など様々な地域素材がつながってくる。さらに新堀川から精進川そして裁断橋……次から次へとつながっていく。これまで「地域素材を活用した教材」は学年毎の点であったが、こうした考えでつなげていくことで、線となり面となっていく可能性がある。児童にとって地域が時間的にも、空間的にも面としてつながっていけば、これまで以上に地域への理解が深まり、地域愛や地域の一員としての自覚を育み、「社会に開かれた教育課程」の実現につながっていくものと考ええる。

謝 辞

平成2年及び平成28年の全国小学校社会科研究協議会名古屋大会の実行委員、実践者など大会関係者の方々、長年にわたり白鳥小学区の地域素材の発掘・教材化を図られた歴代の教職員に敬意を表するとともに感謝申し上げます。本稿に対して貴重なご助言を賜った椙山女学園大学教育学部の野崎健太郎准教授に深く感謝し、厚くお礼申し上げます。

■引用文献

- 大坂谷吉行 (2000) 小学校生活科教育からみた望ましい公園像, 日本建築学会技術報告集, **10**: 263-268.
- 春日市教育委員会・春日市立小中学校 (2017) 市民とともに歩み続けるコミュニティ・スクール, 「社会に開かれた教育課程」の推進, p. 168, ぎょうせい.
- 澤田俊明, 長嶋紀之, 山中英生, 水口裕之 (1996) 生活科の視点から見た屋外生活空間の利用状況に関する分析, 環境システム研究, **24**: 203-209.
- 柴田真介 (2015) 友達と関わりながら自然に関心をもたせる生活科学習—自然遊園地作りの実践を通して—, 椋山女学園大学教育学部紀要, **8**: 169-178.
- 柴田真介 (2016) 地域の自然との関わりを深める生活科学習—天白川での活動を通して—, 椋山女学園大学教育学部, **9**: 135-146.
- 泊善三郎 (2008) 小学校社会科「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」の指導について, 文教大学教育学部紀要, **42**: 69-78.
- 名古屋市社会科教育研究会 (1991) 第28回全国小学校社会科研究協議会名古屋大会報告書.
- 中野光孝 (2013) 夢やロマンを大切にしたい地層指導の試み—一足下の地面を見つめることを出発点として—, 椋山女学園大学教育学部紀要, **6**: 217-239.
- 名古屋市社会科教育研究会 (2016) 第54回全国小学校社会科研究協議会名古屋大会研究紀要.
- 名古屋市立白鳥小学校 (1990) 目でみる白鳥.
- 名古屋市立白鳥小学校 (1978) わが郷土白鳥.
- 林宗弘 (2014) 小学校におけるビオトープを活用した文理融合型総合学習の実践, 椋山女学園大学教育学部紀要, **7**: 157-171.
- 松岡尚敏 (2007) 社会科教育における地域連携の動向と展望, 社会科教育研究, **102**: 1-12.
- 松田武雄 (2017) 「社会に開かれた教育課程」の歴史的考察, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, **50**: 133-140.
- 森本正巳 (1991) 「開発単位」の変遷 (第2報), 名古屋女子大学紀要, **37**: 49-57.
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成29年), p. 344, 東洋館出版社.
- 文部省 (1988) 小学校学習指導要領 (平成元年3月) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322235.htm#micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/11/06/1403162_02_1.pdf (2019年1月15日閲覧可能).
- 文部省 (1998) 小学校学習指導要領 (平成10年12月) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1319941.htm (2019年1月15日閲覧可能).
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領 (平成20年12月) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm (2019年1月15日閲覧可能).